２０２３年１月22　午前礼拝
「人間をとる漁師」　説教者: 堺希望伝道師

【引用聖句】

マタイ 4:18～22

18. イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だったからである。
19. イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」
20. 彼らはすぐに網を捨てて従った。
21. そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。
22. 彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った。

【説教要約】

先回は、イエス様の宣教のはじまりを見ました。それは聖書で預言されていたことの成就でした。

マタイ 4:15, 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。
マタイ 4:16, 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」
マタイ 4:17, この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

イエス様は、辺境のガリラヤで活動を始められるのです。その場所は神様から離れ、信仰のない人々だと見下されていた地でした。しかしイエス様は、その落ちこぼれで不信仰な人々の元へ行き、一緒に住まれました。「天の御国が近づいたから」。イエス様が来られたこと自体、神様の国＝天の御国が来たことでした。神様の方から近づいてくださったのです。預言通りガリラヤには光が照りました。

私たちにも、イエス様の方から近づいてくださったのです。神を求めず、反抗する者に、神は近づいてくださったのです。自分がどんなに良いことをしてあげても礼も言わず、真剣に忠告しても無視して好き勝手に生きる人がいるなら、いつか愛想が尽きます。まして、良いことをした返しに危害を加えられたら、二度と関わりたくないと思ってしまいます。

しかしイエス様は、まさに神に対して感謝も関心もない人々のところへ真っ先に行き、宣教されたのです。これが神の愛です。それだけで終わらず、イエス様は直接お声をかけられました。

①「してあげよう」

マタイ４：18, イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だったからである。
マタイ４：19, イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」
マタイ４：20, 彼らはすぐに網を捨てて従った。
マタイ４：21, そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。
マタイ４：22, 彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った。

４人の漁師たちが出てきます。彼らに声をかけ、弟子に加えられたのです。いつものように働き、魚を捕っているところや、捕る準備をしているところにイエス様がやって来られるのです。彼らは、詳しく聖書を勉強していたわけではありませんでした。

使徒４：13a, 彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いた

漁師なので、無学と言えば当然とも言えます。一生を漁師として過ごし、ガリラヤで生きていくのです。しかしイエス様は、宣教に全く関係のなかった彼らを呼ばれました。「ついて来なさい」はニュアンスも含めると「さあついておいで！」という強い呼びかけです。

普通、弟子入りするとしたら才能や努力、あるいは知識、家柄などが関係します。しかしイエス様の弟子にはこの世の肩書は必要ではないのです。イエス様を信じる人すべてが、イエス様の弟子となれるのです。

また、重要なことはついていった人を「人間をとる漁師にして『あげよう』」ということです。自分の力で神の働きにふさわしくなるのではないのです。イエス様がそのようにしてくださるのです。

イエス様の後について行く者は、この世での立派な肩書きは要りません。私たち人間の能力によっては、だれ一人として、神の働きを担うことはできないからです。このことはこの世の常識と異なっています。

ヘブル 11：8, 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。
ヘブル 11：9, 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、

「信仰の父」と呼ばれるアブラハムは、75 歳の時に故郷から出ていくように神様から呼ばれます。今のイスラエルに導かれ、「この場所をあなたに与える」と素晴らしい約束をいただきますが、それはずっと後のことだったのです。それまで彼は約束をもらっているのにも関わらず、外国人＝寄留者として生活しました。400 年後に、その地は出エジプトした彼の

子孫であるイスラエル人に与えられました。アブラハムは、信仰によって神の呼ぶ声に答えたのです。

モーセは、元気な 40 歳の時には神に呼ばれることはありませんでした。自分でリーダーになろうとして敵のエジプト人を殺しますが、エジプト人からも仲間からも怖がられて挫折します。力を失った 80 歳の時にモーセは神に呼ばれ、イスラエルのリーダーとされました。自分の力ではなく、神に信頼を置くようになったのです。

イエス様についていくのには、信仰があれば十分なのです。イエス様は私たちに福音を伝えただけでなく、「ついて来なさい」＝「一緒にいなさい」と言ってくださっているのです。なんと幸いなことでしょうか。しかし、ついて行ったからといって、いつもうまくいくわけではありません。弟子たちは皆、イエス様が逮捕されるときに逃げたのです。

マタイ 26 : 56, しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書が実現するためです。」そのとき、弟子たちはみな、イエスを見捨てて、逃げてしまった。

またペテロは、イエス様と自分は何の関係もないと宣言してしまいました。

マタイ 26 : 69, ペテロが外の中庭にすわっていると、女中のひとりが来て言った。「あなたも、ガリラヤ人イエスといっしょにいましたね。」
マタイ 26 : 70, しかし、ペテロはみなの前でそれを打ち消して、「何を言っているのか、私にはわからない」と言った。
マタイ 26 : 71, そして、ペテロが入口まで出て行くと、ほかの女中が、彼を見て、そこにいる人々に言った。「この人はナザレ人イエスといっしょでした。」
マタイ 26 : 72, それで、ペテロは、またもそれを打ち消し、誓って、「そんな人は知らない」と言った。
マタイ 26 : 73, しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる」と言った。
マタイ 26 : 74, すると彼は、「そんな人は知らない」と言って、のろいをかけて誓い始めた。するとすぐに、鶏が鳴いた。
マタイ 26 : 75, そこでペテロは、「鶏が鳴く前に三度、あなたは、わたしを知らないと言います」とイエスの言われたあのことばを思い出した。そうして、彼は出て行って、激しく泣いた。

しかし、彼らはこれで終わりませんでした。なぜなら、「人間をとる漁師にしてあげよう」とイエス様が言われたからです。そして彼らは、見る人がイエス様の弟子であるとわかる程にまで成長しました。

使徒 4 : 13, 彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。

見捨てないイエス様が成長させてくださるなら、イエス様についていく道は絶対に大丈夫です。

②「すぐに……従った」
マタイ４：22, 彼らはすぐに網を捨てて従った。

イエス様の呼びかけに、彼らはすぐに従いました。今までの生活や家族、故郷を置き去りにしてイエス様についていく決断をしたのです。これは人間業ではないですね。生活のすべてを投げ出したのです。なぜこのような決断ができたか考えると、彼らはイエス様の愛を深く知っていたからだと思います。

マタイ 4:15, 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。
マタイ 4:16, 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」
マタイ 4:17, この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

この時点ではまだ、イエス様が神の御子だとか十字架にかかられるとか知らなかったでしょう。しかしイエス様を通して、神様が自分たちを憐れんでくださったということが良くわかったんだと思います。不信仰で神の敵である者に、神は真っ先に助けの手を伸べてくださった。預言通り、今までは死の中にいるようであったのに、いのちの光が輝いたように感じたのです。

イエス様なら、決して裏切ることはない。この方の行く道なら、絶対安心だ。心からそう思えたから、彼らはすぐイエス様についていけたのではないでしょうか。まさに、彼らの心にイエス様の光が差し込んでいたのです。彼らが捨てたものは仕事や収入、家族、故郷です。それをイエス様のためにささげたということです。

それら見えるものも大きすぎる犠牲に見えます。しかし中心は、彼らは第一に自分自身を神にささげたということです。イエス様についていくのにためらいはありませんでした。ついていこうとすれば、仕事などから離れる必要があったので、彼らはそれも捨てたのです。しかし第一には、彼らは自分自身をささげたのです。それは、ほかの何よりも、イエス様についていくことが一番の目的になったということです。

ここから、献げるということについて学べます。献げるというと思い浮かぶのは、献金や奉仕、献身ということばもあります。どれも「ささげる」という字が入っています。物や時間を犠牲にすることに目が行ってしまいますが、実は神様は物や時間を第一に求めておられないことをご存じでしょうか。

使徒 17：24, この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。
使徒 17：25, また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。

これはパウロの証です。神様はこの世界を造られた方ですから、何かに不足することはありません。また衝撃的ですが、「人の手によって仕えられる必要はありません」と言われます。私たちが神様を生かしているのではなく、神様が私たちを毎日生かしてくださっているからです。

ですからこう言われています。

Ⅱコリント 9：7, ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。
Ⅱコリント 9：8, 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。

神様が求めておられるのは、私たちの心なのです。私たちが神様への感謝や喜びから何かを献げるとき、それを神様は喜んでくださいます。第一に私たち自身を神様に献げているからです。

ですから、実は献げられるものはとても多いことに気づきます。献金や奉仕だけでなく、この礼拝やそれぞれが家でしている祈り、一人で聖書を読む時間などもそうだと言えます。それを神様への感謝から献げることこそ、一番大切なことなのです。

自分が何をどれくらい献げているか以上に、心から感謝して献げているかどうかに目を留めてください。毎日の神様と過ごす祈りの時間、聖書を読む時間、それを神様に献げているかどうかに目を留めてください。なぜなら、神様に心を留めなくても献金や聖書を読むことはできてしまうからです。しかしそれは神様の喜ばれる献げものではありません。

今日見てきた弟子たちは、イエス様への喜びや感謝、そこから出てくる信頼によってすぐにすべてを捨てました。素晴らしいのは、それが強いられてしたことではないことです。イエス様は本当に心に触れて、喜びを増してくださるお方です。